# 常照

佛教大学附属図書館報

2021

NO.68

佛教大学附属図書館

ISSN 0388-6700

常照
佛教大学附属図書館報
2021 NO.68

目次

ご挨拶
佛教大学長　伊藤 真宏　1

生誕 150 年 シーボーム・ラウントリー
附属図書館長・社会学部教授　藤井 透　3

電脳の世界に開かれた玄関
歴史学部歴史学科教授　貝 英幸　4

書物は智慧の光にして、思想の命を永遠へとつなぐ
教育学部教育学科教授　相馬 伸一　8

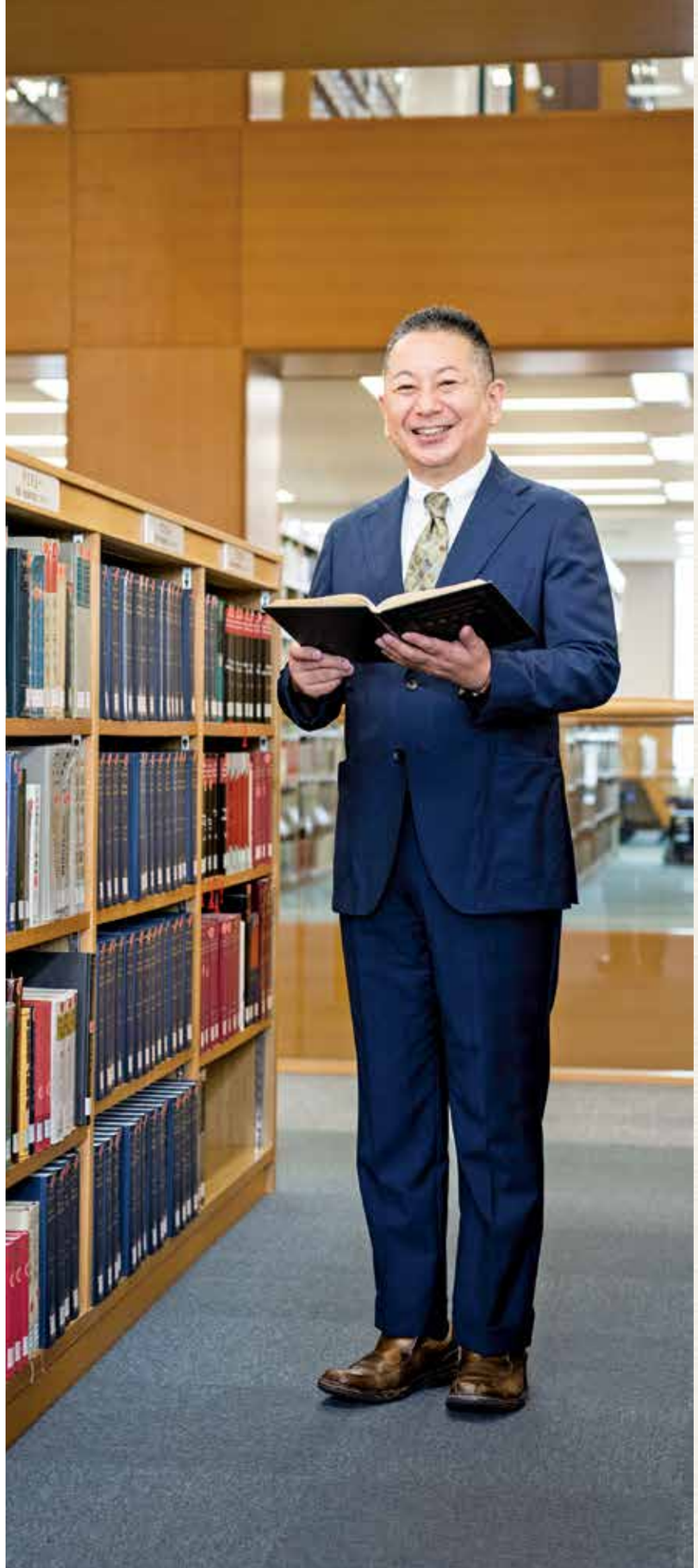
新収資料紹介
春日版『大方等大集月蔵経』巻六
仏教学部仏教学科講師　南 宏信　12

図書館を想う
保健医療技術学部看護学科教授　藪下 八重　16

佛教大学附属図書館 新型コロナウイルス感染症に関する対応　20

佛教大学附属図書館の事業活動報告（2020 ～ 2021 年度前半期）　24

佛教大学附属図書館の沿革と「成徳常照館」の由来　25



# ご挨拶

佛教大学長
伊藤 真宏

佛教大学の第13代学長に就任しました、伊藤真宏です。どうぞよろしくお願いします。

私は、教員として仏教学部に所属しております が、18歳で佛教大学に入学してから現在まで約40年、図書館にお世話にならないときはありませんでした。私が学生時代に過ごした図書館は、今はもうありませんが、開学60周年記念事業として建設され、地上5階地下1階建てで研究室も同居する複合図書館棟でした。

その図書館には、仏教学科の先生方の研究室、仏教学科資料室、大学院の授業や研究発表などが行なわれる演習室、大学院生の研究室などがすべて入っており、特に大学院の時代は、そこですべてが事足りるような、佛教大学大学院の「ワンストップサービス」を享受できる場でありました。「大学に来る」というよりも「図書館に来る」といった方がふさわしく、仏教学科資料室に居なければ図書館に居るという具合でした。図書館入り口脇の階

段を上がったすぐの閲覧室のテーブルに、日本が世界に誇る漢和辞典の最高峰、『諸橋大漢和辞典』が置いてあり、そこに陣取って長時間、それらの辞典を広げたまま様々な資料を調べ、テーブルを独り占めにして勉強したものです。さすがは佛教大学で、仏教関係の専門書籍や論文も豊富に所蔵され、「図書館は大学の顔」といわれるのが、その通りであると実感できました。

現在の図書館は開学80周年記念事業として1997（平成9）年に完成した、地上5階地下2階建ての、100万冊収蔵できる立派な図書館であり、大学図書館としての威容を誇ります。すべてのフロアの天井が高く、静寂が保たれ、光を上手に取り込む設計でとても明るく、どこにいても、読書はもちろん、調べ物や新聞を広げたり、リポートなどを執筆したり、自分だけの時間を楽しむことができます。特に紫野の高台から臨む北山から比叡山、東山を一望できる景観は、京都のどこの図書館よりも景色がよいのではないでしょうか。それは例えば読むことに疲れても目を癒してくれるものであり、本学図書館の利便性の一端を担っているといえます。

当然ですが、仏教書や関係の論文雑誌が豊富で、7学部14学科それぞれの専門書もそろっていて、必要にして十分な書籍や雑誌が開架されており、学生は自分の目的に応じた図書館の利用が可能です。大学の教育と研究に資する多様な資料が所蔵されていて、学生のみならず、教職員や地域の方々にも利用され、大学の機能の一つである社会貢献の役割も果たしています。

今はデジタル全盛の時代です。世の図書館もそれに対応して、雑誌論文はPDF化され、古典籍もデジタル画像が公開され、わざわざ図書館や所蔵元に行かなくとも、さまざまな研究資料をデスク上のPC端末や手元のスマホで確認できるようになりました。信頼のおける大きな辞典がインターネット上で見られ、調べられないものがないといっても過言ではありません。辞書を広げっぱなしでテーブルを占拠していた私の院生時代は、まさに隔世の感となりました。それでも紙の辞典を広げることに意義がある、と思っている私は、すでに遺物の仲間入りなのかもしれません。

図書館は、言うまでもなく知的遺産の宝庫です。研究に資する必要な書籍や雑誌論文などはもちろん、実際に世の中にはすでに流通していない文化遺産的な書籍も存在します。この「宝の山」で、自分だけがその値打ちを知る貴重な書籍に出会う醍醐味は、デジタルに対応する最新鋭の図書館になっても変わらないと思っています。

# 生誕150年 シーボーム・ラウントリー

附属図書館長・社会学部教授
藤井 透

2020年はベートーヴェンの生誕250年の年だった。世界中のオーケストラや演奏家が多くの演奏会を予定していたが、コロナ禍により中止や入場制限を余儀なくされた。社会科学の世界では、学者の生誕や没後の周年記念事業が絶えて久しい。周年記念事業を企画するにふさわしい人物がいないということなのだろうか。

イギリスの社会調査家で社会改革者であるシーボーム・ラウントリーが生まれたのは、ちょうど150年前の1871年であった。かれの主著である*Poverty.A study of town life*（長沼弘毅訳『貧乏研究』千城、1975年）は、1901年に公刊され、その後の社会調査や福祉国家の形成に大きな影響を与えたが、かれの生誕150年を記念する事業は、寡聞にして聞かない。しかし、*Poverty*刊行100年にあたる2000年前後には、イギリスで*Poverty*初版の復刻版の刊行（2000年）や3巻本からなる専門家による記念出版（2000年）が相次ぐなど、活況を呈した。

*Poverty*はラウントリーの生まれ故郷で、一族が経営するチョコレート会社の所在地でもあるヨークを対象にした社会調査の産物である。かれが調査を始めたのは、空前絶後ともいえるチャールズ・ブースの「ロンドン調査」の刊行に大きな刺激を受けたことはよく知られている。すべてブースの私費で行われた「ロンドン調査」は1889年に第1巻が刊行され、1903年に全17巻が刊行され完結した。大都市ロンドンで行われたブースの社会調査の方法と類似した方法で地方都市ヨークを調査してみたら、どういう結果になるのか。これがラウントリーの調査の動機だったとこれまで言われてきた。

しかし、*Poverty*100年記念の研究成果のひとつであるA.Gillieの研究によれば、みぎの常識は誤りで、*Poverty*は、ラウントリーの父であるジョゼフ・ラウントリーがA.シャーウェルとともに公刊した1899年の*The Temperance Problem and Social Reform*の続編であった。たしかに、両書とも構成が似て、当時の最新の食品研究をも参照した研究だった。なによりも、ブースはあの有名な「貧困線」を line of poverty としか表現しなかったのに、ラウントリー親子は poverty line と表記するなど、新見解は魅力的な観点を示している。社会科学の世界でも、周年記念事業が新しい研究の道を切り開く契機になるのである。

歴史学部歴史学科教授
貝英幸

## はじめに

学会や研究会などに参加すると、学外の知り合いから「佛大の図書館いいですね」と言われることが多い。最初は蔵書数のことか、それとも仏書を中心としたコレクションのことかと思い、どちらもあまり詳しく知らない私は生返事を返していたが、違っていることに最近気がついた。

近年、図書館はデータベースや電子書籍など、様々な電子情報が加わることにより学術研究の世界に果たす役割が変わりつつある。これに応じて、図書館の利用の仕方も変わりつつあるが、「佛大の図書館いいですね」と言われているのは、どうやらこちらの方のことのようである。

考えてみれば、かくゆう私自身も図書館に直接赴き書籍や雑誌を閲覧するだけでなく、研究室や自宅から、館が提供する電子情報にアクセスすることが多くなっている。ことに昨年来のコロナ禍のもとで授業は遠隔化を余儀なくされたが、そうしたなかにあって図書館を含むweb上の電子情報には大いに助けられた。今回偶々『常照』への執筆を依頼されたことから、そうした図書館が提供する電子情報をめぐるいくつかの問題について、自らの経験を織り交ぜながら述べてみたい。

## 「BIRD」の可能性

まず最初にあげておきたいのが、図書館ポータルサイト「BIRD」である。わざわざ断るまでもなく、「BIRD」という名称自体は、Bukkyo university library's Information & Research Databasesの頭文字から取られたものである。

図書館のトップページは多くの大学で似た様な作りになっており、それらの多くはまた大学に因んだ名称が付されている。BIRDという名称は、大空を自由に飛び回る鳥の姿を学術世界を飛び回る鳥になぞらえた（と勝手に想像している）もので、よく考えられていると感心するところであるが、BIRDで特筆すべきは、検索の結果示される情報の種類やその集約の仕方、使用感など、相当に工夫されている点にある。

BIRDに限らず、様々な情報へのアクセスをうながす総合的なウェブサイトを「ポータルサイト」と呼ぶが、このポータルという語は元は建築用語で、宮殿などの表玄関を表す語でもある。つまりBIRDは、学術世界の入り口である図書館がウェブ上に開いたもう一つの玄関ということになる。

さて、BIRDの玄関を入ってみよう。トップページを開くと、まず最初に目に飛び込んでくるのは「検索窓」である。先に、多くの大学図書館のトップページは似た様な作りだと述べた



が、実はそれらの多くでは、ここは蔵書の検索窓（OPAC）であることが多い。ところがBIRDにあるのは「学術情報」の検索窓で、蔵書の検索窓ではない。蔵書の検索は、検索窓のすぐ下に並んだ「お気軽検索」、「蔵書検索」、「ジャパンナレッジ」の三つのバナーの一つでしかない。つまりBIRDにおいては、蔵書の検索はあくまでも検索事項の一つに過ぎないのである。

この背景には、通信教育課程を併設しているという本学の特別な事情が考えられる。通信教育課程における学習のサポートという面からいえば、通信教育の学びは実際の図書館を利用しない形での学びへと行きつかざるをえない。これは何も図書や書籍を利用しないという意味ではなく、遠く離れた場所からBIRDにアクセスし、引き出した学術情報をもとに自らの居住地にある図書館で実物の書籍や論文を閲覧、複写するような学びの形ということである。そのため、図書館はこうした利用をあらかじめ想定し、それに応じたサービスとして提供しているということでもある。この場合、図書館の良し悪しは、実際の書籍をどれだけ所蔵しているかではなく、BIRDを介した学術情報の入手がどれだけ容易であるかに重点が置かれることになるだろう。

しかも、図書の検索は、書名や著者名、キーワードなど単純な検索だけではない。われわれが図書館で検索する際に、必要に応じてレファレンスエリアで辞書・事典などを使って簡単な調べものをするといった所作、情報収集の際に普通に、しかもほぼ意識せずにしていることにも考えを及ぼす必要がある。

この情報を集めるという点に焦点をあて作業の中身を考えてみると、蔵書を検索しそのありかを示すというこれまでOPACが担ってきた仕事は、あまり役に立たない。BIRDの検索が蔵書中心の検索ではなく、検索事項に関連する事項を「お気軽検索」として示し、さらにはある程度の調べものもできるように「ジャパンナレッジ」にもアクセスできるよう工夫されているのは、情報を収集するという点にフォーカスした結果によるものである。

ちなみに本学同様に通信教育課程を設置している他の大学を見てみても、図書館を介した情報検索という観点で、ポータルサイトを工夫している大学はほかに見当たらない。図書館による遠隔での学びのサポートの一つの形として、もう少しアピールしてもよいだろう。

## シームレスな利用環境の構築

さて、BIRDの検索が蔵書中心ではない理由はほかにも考えられる。先述した理由が表向きの理由だとすれば、裏の理由とでもいえばよいだろうか。あるいはこちらこそが表向きの理由だろうか。

それは近年の情報検索におけるシームレス化の進展と大いに関係している。「ジャパンナレッジ」で、任意の事項を検索することにより実感できるので、ここでは試しに本学が位置する「紫野」という言葉を検索してみよう。（**画像1**）

画像1

右は検索の結果で、そこには検索語句である「紫野」の事項が一覧で示されている。一覧は『日本大百科全書』や『世界大百科事典』などの事典（ことてん）類に始まり、『デジタル大辞泉』や『日本国語大辞典』、『角川古語大辞典』などの辞典（ことばてん）、歴史的な地名という性格から『国史大辞典』や『日本歴史地名大系』、『角川日本地名大辞典』といった歴史・地名事典など広範囲に及ぶ。さらに左側に表示された「検索コンテンツ」へと目を移せば、『古事類苑』や『群書類従』など、研究者が使うような史料集にまで検索の範囲が及んでいることがわかる。

もちろんジャパンナレッジは本学が独自に提供する情報サービスではないが、BIRD ではジャパンナレッジを、先にみた蔵書の検索などと「シームレスな形」で組み合わせ総合的な情報検索手段として提供している。BIRD を利用している限りは、今自分が何のサービスを利用しているのかをあまり意識することはない。近年の情報検索のトレンドが先取りされ、図書館が提供する一般的（当たり前）なサービスとして実現されている点は、特筆に値するのである。

もちろん改善の余地は残されている。執筆のどさくさにまぎれて工夫してほしい点をリクエストしておこう。日本史学の研究という立場からは「古典籍総合目録データベース」、「国立歴史民俗博物館データベース」についても容易にアクセスできる位置に配置してほしい。特に国文学研究資料館が提供する「古典籍総合目録データベース」は、『国書総目録』の継承・発展版データベースであり、学生に史料を検索する際には必ず参照するよう指示するサイトの一つで、歴史学のみならず、国文学や仏教学においても利用の頻度は高い。同サイトのサービス自体もシームレスな形で徐々に充実が図られている。

残念ながら BIRD では、同サイトのリンクは階層深くに配置され、アクセスのバナーにたどり着くまでが容易ではない。個人的にはトップページに設けられた「ピックアップ」に表示されてもよいほどのサービスだと思っている。一考されたい。

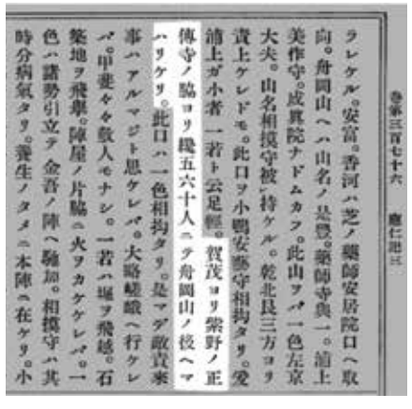
画像 2

ここで注目すべきは、結果として表示された情報が、本来は別々の事典・辞書類の情報であるということである。**（画像 2）**

これまでであれば、「紫野」という語を、それぞれ別の事典や辞書で調べ、事項の説明をメモするのがせいぜいであった。しかもその際は、辞書で言葉の意味を調べ、次に事典で事項の説明を確認し、地名事典を…という形で、何を使ってどのような情報を得るかをはっきりと意識しておく必要があった。どのような情報が得たいからどの事典・辞典を調べるというように、検索の目的を明確にした検索が必要で、それは多分に経験がものを言う部分でもあった。

何を調べればよいのか皆目見当がつかない言葉を、事典・辞書コーナーに陣取り、片っ端から検索した経験があるが、ジャパンナレッジでは、この一連のプロセスが瞬時に完了してしまうのである。

本来は「継ぎ目がない」ことを意味する「シームレス」という語は、ICT の分野では複数のサービスにおける自然な情報利用のことを指すが、ジャパンナレッジではこうしたシームレスな情報検索が実現されているのである。



画像 3

話を戻そう。こうしたシームレスな情報検索は、辞書類の検索にとどまらない。先に試した検索の対象を「見出し」から「全文」に切り替えてやれば、『群書類従』に含まれる「紫野」という言葉は実に一五四件もあることがわかり、さらにはそこから史料の原文へと数クリックで遷移することも可能である。ちなみに検索結果から、私の研究する室町時代にかかわる記録「応仁記」を選択してみると、右のような史料の原文が示される。**（画像 3）**

一つの言葉からスタートした検索は、もはや簡単な調べものの域を超え、史料の検索結果として表示されている。事典・辞典類の検索に加え、史料集の全文検索までもがシームレスな形で提供されているのである。

## 「検索するという作業」の意味

こうしたシームレスな検索の実現は、先述した図書館で複数辞書を渡り歩くような検索を経験することによって得られる学びの対極に位置している。

われわれが学生時代に経験した、図書館で検索するという一連の「作業」、すなわち検索の過程で、調べ、考え、再度調べるというプロセスを繰り返しながら得た経験は無駄だったのかという錯覚に陥ってしまう。便利になった今、それらは過去の不便だった頃のこととしてどこかへ追いやられるものなのだろうか。

実は図書館での検索に関して、われわれが学びとして認識している問題は、検索し必要な情報を得るための手立てを知るという学びとは別の学びである。すべての学生が等しく経験すべきことでもなく、またその過程を経なければならないわけでもない。多くの人が手にしたスマートフォンで、わからないことは Google なり、Yahoo なりで検索してみるのが当たり前になった時代に、学術的な情報検索も新たな段階へと進んでいるのであり、そうした状況に応じた学び（教え方）を模索する段階がきたと認識すべきだろう。

これまでであれば、史料の読解が十分にできない初年次の学生には、簡単に記述された事典・辞書類の検索を薦め、史料を学び始める二年生以降になってはじめて史料原文を含んだ検索を指導するのが一般的であった。教える際に、簡単なものと専門的なものを教える側があらかじめ選別した材料を提供していたわけで、これまでであればそれが可能であった。

しかし「シームレスな環境」の下では、ごく簡単な記事から史料原文までがまとめて表示される。初歩的なことも専門的なことも同じように表示されるという状況のもとでは、情報の性格の違いをどう明確にし、今の自分に必要な情報が何なのかを、自らの力で峻別する力を養う方向に向かわざるを得ない。教える側として、あまり意識したことがない問題である。シームレスな情報検索の実現とともに、今後の教育のあり方を考えねばならない時期に差し掛かっているのである。

## 研究の未来

数年前まで担当していた「歴史学とコンピュータ」という授業では、「歴史学、特に日本史の分野はデジタル化が最も遅れている学問分野」と説明していたが、気がつけばスマホで古文書の読み方を学ぶアプリが登場し、古文書など「くずし字」を一瞬にして翻刻するアプリの開発も佳境にさしかかっている。また研究に用いる画像データは、高精細の画像形式が IIIF（トリプルアイエフ：International Image Interoperability Framework）として標準化されつつある。なによりもそこで提供されるデータは「オープンアクセス」化の議論が始まっている。もはや日本史学という枠だけでなく人文科学全般をまきこむような情報処理「革命」の真っただ中で、いかにして研究・教育を進めるかを考えなければならない時期にさしかかっている。教育の専門家、研究の専門家に情報の専門家を加え、進むべき道を模索する時が来ているのだろう。

図書館へ出向き特別な史料を閲覧するという、自らの学生時代の経験に少しばかりのノスタルジーを感じながら、誇るべき玄関を供えた図書館に集う日は意外に近いかもしれない。

貝 英幸（かい ひでゆき）
歴史学部歴史学科教授
歴史学部長

〈専門分野〉　日本中世史、古文書学
〈研究課題〉　洛中近接地域の歴史的変遷についての研究、地域権力の対外交渉についての研究
〈略歴〉　1992 年佛教大学大学院文学研究科日本史学専攻単位取得退学。
1992 年京都市歴史資料館嘱託職員（学芸員）、佛教大学非常勤講師。
2000 年佛教大学文学部専任講師。2008 年佛教大学文学部准教授。
2014 年佛教大学歴史学部教授。2018 年より歴史学部長

# 書物は智慧の光にして、思想の命を永遠へとつなぐ

教育学部教育学科教授　相馬伸一

## はじめに

ゼミナールの面談で研究室に学生が来ると、「ここにある本を全部読んだんですか」ときかれる。そんなわけはない。「研究に必要だし、買っておかないと手に入りにくくなるからね」などと答える。常日頃、学生たちに本を読むように言っているが、私自身は気に入った本を繰り返し読む質で、いつまでもあまりジャンルが広がらない。以前は、必要な本だと思うとあまり考えもせずに買っていた。しかし、未読の本が増える一方だと、無言の圧を感じて落ち込む。そんなわけで、少し以前から購入前にはかなり熟慮するようになった。そんな私にとって、図書館はますます不可欠の存在だ。

## コメニウスと書物

私の専門分野は教育哲学や教育思想史だが、とくに一七世紀ヨーロッパ、そのなかでもチェコの思想家コメニウス（一五九二～一六七〇）について調べている。彼は、一六五八年に最初の絵入り教科書『世界図絵』を創案し、教育方法に革新をもたらした。ちなみに、そのわずか八年後、京都・二条の儒者の中村惕齋（てきさい）（一六二九～一七〇二）は、コメニウスときわめて似た発想の絵入り本『訓蒙図彙（きんもうずい）』を出している。

コメニウスが生きたのは、宗教対立、政治の混乱、経済の変動、科学的新発見、さらには寒冷化にまで見舞われ、あらゆることが疑わしく思われた時代だった。彼は、最後の宗教戦争といわれる三十年戦争に巻き込まれ、現在のチェコ、ポーランド、オランダ、ハンガリー、イギリス、スウェーデン、スロヴァキアを点々とする亡命の人生を送った。各地の学者、政治家、聖職者と交流し、世界に調和を実現することをめざすパンソフィア（汎知学）という知の体系を構想し、その現実化の手段としてとくに教育を重視した。

コメニウスの著作は一四〇以上にのぼり、やりとりした書簡も五六〇ほど現存している。死後、彼が生まれたチェコ地域ではほぼ忘れ去られていたが、民族主義が芽生えた一九世紀、彼はチェコ史上の重要人物として注目されるようになった。第一次世界大戦後、チェコがスロヴァキアとともに独立すると、紙幣の肖像にも現れるようになり、現在でも、チェコの二〇〇コルナ紙幣に描かれている。

しかし、近代国家形成のなかで注目されたおかげで、コメニウスは、その教育者としての側面ばかりが注目されるようになった。一九三五年、死後、長く忘れ去られていたパンソフィアに関する膨大な草稿が、ドイツのハレにある孤児院の文書館で発見された。しかし、第二次世界大戦のために研究は停滞。戦後のイデオロギー対立も研究交流を妨げた。しかし、冷戦終結から三〇年、コメニウスは、学問・政治・宗教の改善をめざした総合的な思想家と見なされるようになりつつある。

そんなコメニウスは、書物に相当なこだわりがあった。満足のいく挿絵を描く画家が見つからないといって、『世界図絵』の出版を延期したエピソードがあるほどだ。彼は、書物は智慧の光であり、かなりの時間持続して、あちこちに運ばれると言っている。その言葉の通り、彼の著作は彼が訪れなかった国々でも翻訳され、広く流布した。

コメニウスの『世界図絵』1777 年版。

中村惕齋の『増補頭書訓蒙図彙』寛政 10 年（1798 年）版。

コメニウス関係の著書。左から
『ヨハネス・コメニウス』（講談社、2017年）、
『コメニウスの旅』（九州大学出版会、2018年）、
『オンライン教育熟議オン・コメニウス』（晃洋書房、2020年）

ただ、コメニウスの著作は、とにかく語学の壁が高く、何とか読めるようになるまでに相当の修行期間が要る。今でも苦労は絶えない。しかし、彼を研究対象に選んだおかげで、ヨーロッパ各地を訪れることができる。絶えざる変転の人生を送った彼にはすまないが…。

## ヨーロッパの図書館探訪

印刷術が普及するまで書物は筆写によってお り、洋の東西を問わず、聖職者育成の機関である僧院は知の宝庫であった。一五世紀、スイスのザンクト・ガレン修道院から、古代ローマの弁論家クィンティリアヌスの写本が見つかり、ルネサンスの展開に大きな影響を与えたのは有名だ。チェコの国立図書館はもとはイエズス会の施設であり、伝統ある書庫を公開しているが、その荘厳なたたずまいには思わず魅せられてしまう。

書庫といえば、王侯貴族のそれも素晴らしい。しかし、公開性は低かった。その点では大学図書館の意義は大きい。もう二〇年以上前になるが、イギリスに滞在して博士論文を書いていた時、なかなか本腰が入らず、帰国が近くなってから必要な文献がオックスフォード大学にあるのを知った。ボドリアン図書館と呼ばれる、大学図書館の元祖ともいうべきところである。手続きが不十分で断られても仕方がなかったが、とにかく行ってみると、年配の女性司書が美しい英語で対応してくれ、帰国後、マイクロフィルムが届いて助けられた。

それ以来、私の心理的な敷居は下がり、ロンドンの大英図書館、ミュンヘンのバイエルン図書館、プラハのチェコ国立図書館、サンクトペテルブルクのロシア東洋学研究所などを訪れた。滞在期間が限られるので、まず、事前に文献検索をして、担当者に連絡する。いつまでも返事がなく、焦らせられることもたびたびだ。ルールがあまりに厳格で辟易するようなところがあるかと思えば、ローマのように休館日なのに入れてくれたところもあった。

大国の大図書館ばかりが注目されがちだが、小国の図書館や地方図書館を下に見るなど失礼というもの。思い出深いのは、スウェーデンのノルチェピング市立図書館だ。コメニウスが訪れたことがある街ということで立ち寄ったのだが、宿のオーナーに事情を話すと各所に電話してくれ、図書館に行くように勧められた。彼女がニヤッと微笑んだのがなぜかわからなかっ

永遠に消え去ってしまう。知を守る図書館の存在は、文字通り有り難い。

## 書物ありて知は芽吹く

昨年はコメニウスの没後三五〇年にあたり、その前年の秋、東京のチェコセンターから記念行事の企画を依頼された。ちょうど、コメニウスが歴史の中でどのように受けとめられてきたかをテーマに『コメニウスの旅』（九州大学出版会、二〇一八年）を上梓し、佛教大学学術賞（社会科学部門）をいただいて気力だけは全開で、コメニウスと日本人のつながりを深堀りしようと思い立った。

日本というと画一的で中央集権的というステレオタイプがある。しかし、細かに見ていけば、明治以降の教育の近代化にも地方色がある。それをうかがわせる資料として、地方教育会の雑誌がある。そこで、コメニウスをはじめとした西洋の教育思想が各地でどのように紹介されてきたかを調べることにした。いくつかの雑誌の目録と復刻は佛教大学図書館に所蔵されており、まずそれらを調べた。それが一段落してからは、各都道府県の図書館や大学図書館の訪問調査を始めた。詳しく書くのは憚られるが、雑誌の目次を見事に整理している県もあれば、かなり欠本の多い県もある。参考調査係の皆さんには、訪問や複写の申し込みで大変お世話になっている。

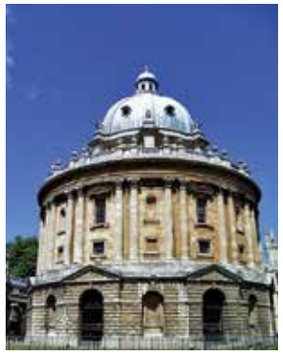
昨年春からは、コロナ禍で入館謝絶という大学図書館が多く、調査は順調ではない。しかし、私は、「書物は智慧の光」というコメニウスの洞察に改めて感じ入っている。思想の受容というと、ともすれば一部の知識人の間のことと思われがちだ。しかし、知識は一部の知識人の占有物ではない。事実、コメニウスに関心を持ったのは、帝国大学や高等師範学校の教授たちだけではなかった。いくつか例をあげておこう。

滋賀・水口藩の藩士の家に生まれた山縣悌三郎（一八五九～一九四〇）は、少年向け雑誌の嚆矢とされる『少年園』の刊行で知られるが、彼は『教師之友』などの教育雑誌を創刊し、コメニウスをはじめ西洋の教育家をいち早く紹介した。明治を代表する哲学者の井上円了（一八五八～一九一九）に学んだ新町徳兵衛（のちに徳之、一八七六～一九四五）は、明治三〇年代の宮崎県の教育雑誌でコメニウスの『大教授学』について連載した。彼は京都府立第一高等女学校（現京都府立鴨沂高等学校）の教諭を長く務め、台湾総督府中学校教諭を経て関西大学教授となった。鎌塚扶（一八九六～一九八五）は戦後に広島大学教授も務めたが、広島大学附属中高等学校の初代校長や北海道教育長を歴任した実践派の人物で、戦前は朝鮮総督府の教育行政に携わっていた。その時期に故郷の北海道の教育雑誌にコメニウスの『大教授学』の翻訳を一六回にもわたって寄稿した。戦後、山形県教育委員長を務め、のちに政界に進出して県議会議長になった完戸一郎（一九〇九～一九八二）は、高等小学校教諭だった昭和一〇年にコメニウスについての専門的な論文を山形県の教育雑誌に連載した。

こうした人々の思索には、現在からみれば多少の間違いがあり、主観的な解釈も少なくない。しかし、彼らが過去の思想を主体的に受けとめユニークなかたちで再演したという事実を、軽く見てよいわけがない。思想は書かれることによって、有限な人間の寿命を超えて生き始める。多くの場合、それらは書庫に眠っている。しかし、何かのきっかけで手に取られる。開かれた書物は読者に光を贈り、その光は時に読者の魂を向き変える。

コメニウスは、理論にもこだわったが、それは実践され、さらに応用されてこそ意味を持つと繰り返して論じた。そして、実際に、学問と政治と宗教が対立する泥臭い現実に身を投じた。コメニウスの生き様がここにあげた人々の生き様に作用したのか、これらの人々の社会的志向性がコメニウスと共鳴したのか、そこは議論のあるところだろう。しかし、これらの人々の生き様が書物のもつ偉大な力を物語っているのは間違いない。

り、テキストのデータ化もリクエストできる。データ変換は完璧とはいかないが、ある用語を検索し、力を入れて読むべき箇所を特定できたりする。そうした文献の利用頻度は高くない。しかし、効率性だけを優先させて、安易に廃棄などされれば、その著者の存在も苦心の考察も



オックスフォード大学図書館
ラドクリフカメラ

た。行ってみると、コメニウスの手書きの草稿をはじめ貴重図書を所蔵していて、心底驚いた。一九世紀、資産家が手放したコレクションを買い付け、大切に管理してきたのだという。しかし、さすがに来た日にすぐに閲覧というのは無理で、二年後に再訪した。大図書館では手書きの草稿をさわらせてくれるなどということはまずない。ただ感動した。

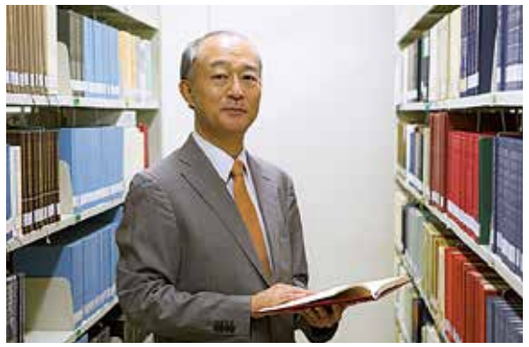
このあと、大きなフェリーでバルト海を渡ってフィンランドに向かったが、途中、エストニアに寄港したので、軽い気持ちで国立図書館に立ち寄ると、興味深い文献があった。出航までの短い時間に書庫から出してくれ、司書の女性が見事な手さばきで古い機械を操ってコピーまでしてくれた。その後に訪れたリトアニアのヴィリニュス大学図書館にも、コメニウスの文献がたくさんあったが、あいにく時間がなかった。しかし、ここにも親切な司書がおられ、必要な部分をスキャンした画像ファイルをその日のうちに送信してくれた。

図書館のデジタル化はグローバルなレベルで進んでいる。訪れるのがすべてということでもないだろう。バイエルンの図書館は、古い蔵書をインターネットで閲覧できるようにしてお

クレメンティヌム（チェコ国立図書館）の書庫

エストニア国立図書館





相馬（そうま） 伸一（しんいち）
教育学部教育学科教授
1963 年、札幌生まれ。筑波大学大学院博士課程教育学研究科単位取得退学。博士（教育学、筑波大学）。広島修道大学専任講師・助教授・教授を経て現職。英国ウォリック大学、チェコ科学アカデミー哲学研究所客員研究員を歴任。現在、教育哲学会理事、教育思想史学会理事・編集委員長。

# 春日版『大方等大集月蔵経』巻六

仏教学部仏教学科講師　南　宏信

## はじめに

本誌末尾には毎回「佛教大学附属図書館の沿革と「成徳常照館」の由来」を掲載している。それによると本図書館は一九三四（昭和九）年に竣工落成してから約九十年を経ようとしており、現在の図書館は、一九九七（平成九）年に竣工した。筆者は翌年一九九八（平成一〇）年に仏教学科に入学し、かれこれ二十年以上に渡って本図書館の恩恵を受けている。

特に思い出すのは大学院在籍時に本庄良文教授の講義で『往生要集義記』を扱ったことである。本学蔵鎌倉期写本『往生要集鈔』四巻や古活字版（無刊記）『往生要集記』全八巻などを横に並べて一字一句の異同を意識しながらの講読は、文献学研究の醍醐味を味わったひと時であった。（詳細は本誌第65号、二〇一八年参照）。その後知り得た諸本を蒐集する中で、新出の東向観音寺蔵本や檀王法林寺蔵本をご住職らの許可を頂戴し、調査・撮影・研究することができたことは本当に僥倖であった。現在は十一種の諸本を確認しており、その全体像を提示するべく尽力している。

さて今回は新収資料の春日版『大方等大集月蔵経』巻六（以下「本経」という）の紹介をさせていただく。

## 書誌概要

まず本経の書誌概要を以下に示す。

縦二七・〇糎、横九・二糎。折本。楮紙。少朱書入。虫損。少シミ。半折一七字五行。外題「大方等大集月蔵経巻第六（擦れ）」、内題「大方等大集月蔵経巻第六」、尾題「大方等大集月蔵経巻第六」、訳者「高齊天竺三蔵那連提耶舎」。内題下に千字文「陶」あり。帖末音釈あり。全二十三紙、紙継ぎの上に摺写している。

## 『大方等大集月蔵経』

北斉・天統二（五六六）年、那連提耶舎訳。本経は、多くの経典を集めて編集された『大方等大集経』六〇巻のうち、第四六巻から五六巻に収録される「月蔵分」に該当し、本経に説く末法思想は中国浄土教に影響を与えた。

その一人である道綽（五六二―六四五）の『安楽集』では本経に説く末法思想を踏襲しており、さらに日本の法然（一一三三―一二一二）はそれを受けて『選択集』に『安楽集』の以下の文を引用する。

その聖道の一種は、今の時証し難し。一つには大聖を去ること遥遠なるに由る。二つには理は深く解は微なるに由る。この故に『大集月蔵経』に云く、「我が末法の時の中に、憶億の衆生、行を起し道を修せんに、いまだ一人も得るもの有らじ」。当今は末法、現にこれ五濁悪世なり。ただ浄土の一門のみ有って通入すべき路なり（原漢文）

このように本経は浄土宗において末法（時）と衆生の能力（機）が相応すべきことを説く文脈で引用されることで知られる。

## 五部大乗経

一方で本経は『華厳経』『大品経』『法華経』『涅槃経』と一括りにし、「五部大乗経」と呼称する。天台の五時説（華厳時・阿含時・方等時・般若時・法華涅槃時）の阿含時以外に対応する代表的な経典を抽出していることに基づいている。さらに近年の研究では智顗（五三八―五九七）の『四教義』『法華玄義』など、四教（蔵通別円）のうち円教において菩薩の五十二位を論じる箇所がその起源であることを山口氏が指摘している。（山口弘江「五部大乗経の起源に関する一考察」（『駒澤大学仏教文学研究』二、二〇一八年））

## 春日版

日本において「五部大乗経」を珍重する伝統は平安時代より始まっており、その後、室町時代にかけて一切経の略本のようにみなされ盛んに書写・開版されるようになる。（大山仁快「五部大乗経研究余録」（『日本歴史』四六六、一九八七年））

その一つに春日版「五部大乗経」がある。春日版とは日本の印刷文化を代表することでよく知られ、奈良の興福寺が平安時代後期に刊行した仏教経典の印刷本の総称である。山本氏は興福寺に現存する版木を調査し、文治五（一一八九）年から江戸時代の元禄十（一六九七）年に渉る現存二七七八枚中から五十種の経典例を報告している。その中で鎌倉時代末から南北朝時代にかけて雕造された春日版「五部大乗経」は明らかに宋版を模したものであることを指摘し、以下のようにいう。

本文は折本の半折六行の姿を取り入れて、その書体は宋版の字体を模した活字体に近く、かつ本文の行間に版心（略経名・巻次など）を刻記している。「五部大乗経」は平安時代から南北朝時代にかけて「一切経の権与」と称されて一切経に準ずる経典として重視されたから、宋版一切経に代わる経典としてことさらに宋版の形式を模した可能性はある。（山本信吉『古典籍が語る―書物の文化史―』八木書店、二〇〇四年）

それでは春日版「五部大乗経」が模した宋版とはなにか。

## 宋版（思渓版）

『新編大蔵経 成立と変遷』（京都仏教各宗学校連合会編法藏館、二〇二〇年）に依るに一口の宋版といっても様々な版が雕造されている。①開宝蔵、②金版大蔵経（広勝寺本、サキャ北寺本、弘法蔵）、③契丹大蔵経（房山石経）、④福州版（東漸寺版、開元寺版）、⑤浙西版（思渓蔵）。

佐々木氏は春日版「五部大乗経」の底本に関する先行研究を整理し、春日版「五部大乗経」に宋版の影響を強く受けた経があることを確認した上で、「五部大乗経」が「すべてが宋版に基づくのか、宋版一切経に依る場合どの宋版を基としたのかは、いまだ明確ではない」と問題提起する。考察の結果、春日版『大方等大集経』は思渓版に基づいていることが判明した。（佐々木勇「春日版『五部大乗経』の底本とされた宋版一切経（一）―刻記の比較による検討―」（『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部第六四号、二〇一五年））

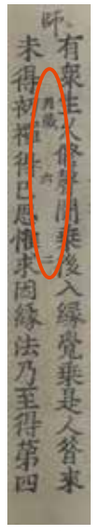
筆者は以前に佐々木氏の樹下神社蔵「五部大乗経」の調査・撮影に同行することができた。そこで岩屋寺蔵思渓版と貞治五年（一三六六）に摺写された樹下神社蔵春日版と本経を比較し、以下に形式的な特徴を見ていく。

## 思渓版・春日版との比較

①冒頭箇所

三本とも字配り・字体など同様であるが、思渓版には天地界があるが春日版と本経にはないことから本経は春日版であろうかと思われる。しかし訳者那連提耶舎の国名を記す「高齊」について、思渓版と春日版には「高齊」とあるが本経は単に「齊」とあるのみである。また千字文について、思渓版が「陶」と刻

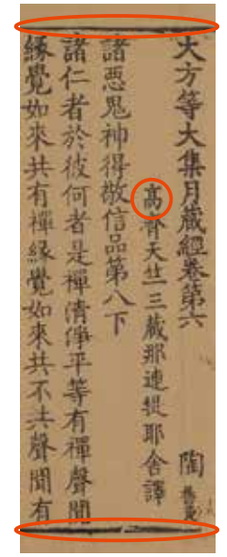
思渓版（岩屋寺蔵）

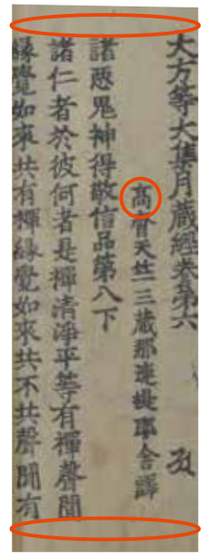

春日版（樹下神社蔵）

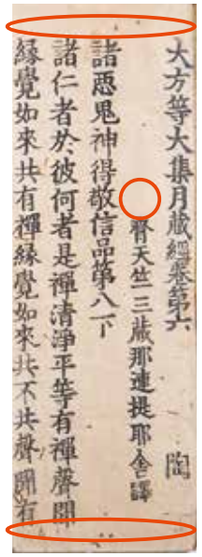
本経（佛大蔵）

②紙継について

紙継において、思渓版は一紙の左辺に略経名・巻次・刻工名などを記した上に糊付けをして料紙を継いでいくので、料紙が剥離しない限り外からは確認することができないし、そもそも春日版とは版心の場所がずれている。また本経は春日版と同じ行間に記されているが、字配りが違う。


思渓版（岩屋寺蔵）


春日版（樹下神社蔵）


本経（佛大蔵）

刻工名が記されているが、春日版には梵字が記されており、本経は思渓版と同じ千字文が記されていることから春日版そのものではなさそうである。

③巻末について

帖末音釈の形式も三本とも同様であるが、本経のみ千字文の「陶」がない。

## おわりに

仏滅直後の第一結集から始まる仏語の伝承は、口伝でまとめられた。その後文字によって記述されるようになり、中国において版本大蔵経が刊行され、近代では金属活字が刊行されていく。本経も長年にわたる大蔵経の伝承過程中の一経となろう。

大学院在籍時、指導教授であった岸一英教授が以下のことをおっしゃっていたことを思い出す。ガリ版刷りの時代からコピー機の時代に移ったことで文献複写が廉価・容易になった。そのことで諸本対照表の作成が可能となって、文献比較が圧倒的に進展したというものであった。そして今はデジタルの時代になり、各大学や文庫などがデジタル画像を公開し続けている。その恩恵により自室にいながらにして海外の貴重資料を利用・閲覧することが可能となった。本図書館もまた同様に様々な資料をデジタルで公開している。

もちろん著作権の問題やデジタルデータの保存年数の問題など、手放しで享受できることばかりではないであろう。出版文化の媒体が様々に変遷する中で、研究のアプローチもまた様々に変様していくが、実物を調査・研究する重要さもまた今回の資料を紹介するなかで改めて実感した次第である。

【付記】本原稿を執筆するに際して、貴重資料の掲載にあたり格別の御高配を賜りました、尾張高野山岩屋寺様、北小松樹下神社様に甚深の感謝を申し上げます。

南 宏信（みなみひろのぶ）
仏教学部仏教学科講師

1979年京都府生まれ。2004年佛教大学大学院文学研究科博士後期課程修了。専門分野は浄土学、仏教文献学。国際仏教学大学院大学日本古写経研究所、知恩院浄土宗学研究所を経て2018年度より佛教大学講師。著書・論文に『日本古写経善本叢刊　書陵部蔵玄一撰無量寿経記　身延文庫蔵義寂撰無量寿経述記』第5輯（国際仏教学大学院大学戦略プロジェクト実行委員会、2013年）、「良忠撰『往生要集鈔』から『往生要集義記』への成立過程―檀王法林寺蔵袋中手択本を中心にして―」（『印度学仏教学研究』59巻2号、2011年）、「法然「八種選択義」の淵源―『往生要集』から『選択集』へ―」（『浄土宗学研究』41号、2015年）など。

# 図書館を想う

保健医療技術学部看護学科教授
藪下 八重

図書館を活用するというテーマで、あらためて「図書館」を考える機会をいただいた。読書量も著作も乏しく、研究も中座している自身にとって赤面する事態である。さらに、佛教大学に奉職しまだ4年目という浅さも追い打ちをかける。図書館機能が充実し、研究室に居ながら文献検索・文献入手が可能な時代と大学の恩恵を受けて、図書館に足を運ぶ機会が少なくなっていることも自覚し、私を困らせた。しかしながら、この個人的危機をチャンスと捉え、本との出会いを振り返りながら初心に返る機会としたい。

私にとっての初めての図書室は、幼稚園のサン＝サーンスの「白鳥」が流れるフロアにあった絵本棚であり、小学校の図書室である。夏休みの課題図書での読書感想文は苦手であったが、アルセーヌ・ルパン全集を楽しみに足を運んだ図書室は大好きで、その空間や規則正しく並んだ本たち、そして軋む木の床や本の匂いが心地よかったことを思い出す。窓の外の景色も懐かしい。中学・高校時代は部活動に明け暮れ、図書室は外から眺めることの方が多かったように思う。受験前に静けさを求めて通った記憶はあるが、読書のための本をじっくり手にすることなく過ぎた気がする。もちろん、図書館がその教育機関の「顔」という認識もなかった頃である。

１９７０年代後半、京都市立看護短期大学で看護の道に進んでからは、講義で興味をもった文献を図書館で手にするようになった。邦訳された看護論も看護雑誌もまだ数えるほどで、『看護覚え書―看護であること・看護でないこと』（フロレンス・ナイチンゲール著、湯槇ます他訳、第三版、現代社、１９７５年）[注1]や『看護の基本となるもの』（ヴァージニア・ヘンダーソン著、湯槇ます　小玉香津子共訳、日本看護協会出版会、１９７３年）[注2]はテキストとして購入した。図書館で何度か閲覧・借用し、手元に置きたい、「これだ！」という箇所にラインを引きたいと思った書籍を後日購入するかたちで、図書館を利用した。

まだコピー機の性能も良くなかったからかもしれない。図書館で幾度も借用し、その後に自身の蔵書としたものに、『臨床看護の本質―患者援助の技術』（アーネスティン・ウィーデンバック著、外口玉子　池田明子訳、現代社、１９６９年）[注3]がある。『Clinical Nursing―a helping art』が原題のこの書は「目的と哲学」の章で、哲学は「その看護婦＊の存在にとって不可欠で、その人なりの看護の仕方のなかに表わされるもの」であり、臨床看護の目的は「ある個人のその時その場でNeed for Helpとして体験しているニードを満たすこと」とある。これらは、看護の道へと私の背中を押し、臨床でのあり方を支えてくれた。他にも、背表紙に「人生の究極的意味」と記されたシモーヌ・ド・ボーヴォワールの『老い』（朝吹三吉訳、人文書院、１９７２年）上下巻[注4]がある。葉脈をデザインした意味深く美しい装丁と「老いという人生の最後の時期に我々はいかなる者となるのか？」という問いに魅かれ、20歳代に手にした。その後の卒論のテーマにもなった大切な蔵書だが、自身が老いの域に入った今、あらためて重厚さを感じる。これらは古い書だが、本学図書館に所蔵されている。

『看護覚え書―看護であること・看護でないこと』（翻訳と原本）

当時、母校の図書館は隣接する病院の医師も訪れ、狭いながらも医学書や看護文献が充実していた。何よりも司書の方が素敵であった。現在の情報検索システムの如く豊かな情報を備え、かつ微笑みを絶やさない穏やかなその方は私の憧れであった。地元の大学病院に移り、野戦病院のような手術室で「私たちどれだけ看護してる?」という日々の疑問から研究手法を求めた際も、当時の看護系雑誌で紹介された「ワークサンプリング法」の文献情報を提供していただいた。臨床の忙しさに埋もれかけたときの心強い道しるべであった。情報化の現在、コロナ禍が加わり、授業も人との交流もオンライン中心となっている。その恩恵も確かだが、図書館での出会いをふり返ると、face to face の場が懐かしい。

その後、臨床から看護基礎教育の場への異動をきっかけに、大学院で学ぶことを選択した。これからは慢性看護の時代と考え、慢性看護学を専攻したことで、炎症性腸疾患（inflammatory bowel disease;IBD）の患者さんたちに出会うことができた。IBDは潰瘍性大腸炎とクローン病を総称し、主に若年発症の指定難病（当時は特定疾患）である。２０００年当時、日本のIBD患者数は約７９，０００人で（最近の統計では全国で約29万人と推定されている）、認知度は低く、専門医も少ないために診断までに5年を要した方もいた。そこで、IBD患者さんの生活の実態と内的体験を明らかにし看護援助に繋げたいと考え、グラウンデッド・セオリー・アプローチを参考に11人のインタビューから生活体験の明確化を試みた。国内のIBDに関する看護の先行研究はまだ数件で、PubMedを活用した。今ならもっと早く広く文献検索が可能であっただろうと思う。

この研究では、「内的体験」という用語の定義に苦労した。辿り着いたのが、立花隆の『宇宙からの帰還』（中央公論社、１９８３年）にある「その体験の中で、自分が何を感じとり、何を考えたか」というような内的意味の解釈を含む表現であっ

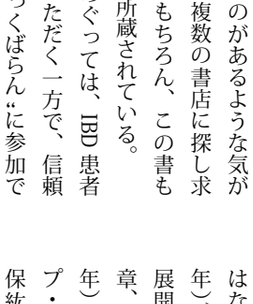
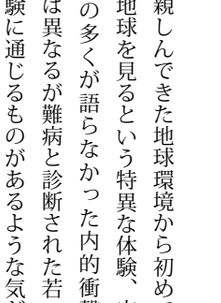
＊2001年の保助看法の一部改正で、性別で異なっていた看護職の名称が「保健師」「助産師」「看護師」に統一された。

本学所蔵図書
注1）『看護覚え書―看護であること・看護でないこと』（フロレンス・ナイチンゲール著、湯槇ます他訳、現代社、2011年）
注2）『看護の基本となるもの』（ヴァージニア・ヘンダーソン著、湯槇ます　小玉香津子訳、日本看護協会出版会、2016年）
注3）『臨床看護の本質―患者援助の技術』（アーネスティン・ウィーデンバック著、外口玉子　池田明子訳、現代社、1984年）
注4）『老い』上下巻（シモーヌ・ド・ボーヴォワール著、朝吹三吉訳、人文書院、2013年）

活動を開始した。現在も世話人としてかかわっているが、この患者会を支援していく際に手引きとしたのが、『セルフヘルプグループわかちあい・ひとりだち・ときはなち』（岡知史著、星和書店、１９９９年）、『セルフヘルプ・グループの理論と展開ーわが国の実践をふまえて』（久保紘章、石川到覚編、中央法規出版、１９９８年）である。また、その後の『セルフヘルプ・グループ当事者へのまなざし』（久保紘章著、相川書房、２００４年）、『セルフ・ヘルプ・グループの理論と実際ー人間としての自立と連帯へのアプローチ』（Gartner,Alan;Riessman,Frank 原著、久保紘章監訳、１９８５年）も有用であった。リースマンのヘルプ・セラピー理論〝人は援助することで最も援助（利益）を受ける〟は、患者さんたちも相補的・側面的支援でかかわる私たち医療者も実感している。これらの文献はすべて本学の紫野図書館に所蔵されており、一昨年の看護学関係のテキスト一部執筆の際、懐かしく手にすることができた。前述の看護文献とともに、これら古き良き文献が看護学科開設わずか10年の佛教大学に整えられていることに誇りを感じる。

『看護の基本となるもの』（翻訳と原本）

大学院修士課程（博士前期課程）を修了後は、教育の場ではなく再び臨床に戻り、２００５年に認定を受けた専門看護師としての活動に専心した。患者さんの療養支援として、駆け込みやすく、ちょっとしたことも聞きやすい、そんな看護相談室を専門看護師の仲間と立ち上げた。さらに病院長の理解を得て、患者・家族の情報ニーズに応えたいと、活用されず眠っていた大学病院内の書籍を集めて総合案内のフロアに図書コーナーを設置した。医療関係書や闘病記、小説、詩集、絵本、歴史書、旅や趣味など７００冊足らずの本が並んだ。大学の図書館とはまた違った形だが、本がある風景はふっと落ち着く空間になる。病院長もご自身の著作を寄贈された。

『老い』上下巻

その後、最後の場として看護基礎教育に戻り、博士後期課程にも進むことになった。研究では、IBD 患者の生活体験を明らかにした以前の研究において「悪化を避ける」の下位概念として抽出された「無理はしない」に着目した。IBD 患者の「無理はしない」とはどのようなことか、どのように培われその人のものとなってきたのか、その構造が明らかになれば患者理解や療養支援に貢献できると考え、尊敬する師の下で研究に取り組んだ。その質的記述的研究デザインとして、シンボリック相互作用論を理論的前提としたグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いている。シンボリック相互作用論を理論的前提とすることにより、人は他者とだけでなく自己ともかかわり、自分自身との相互作用（自己の内部においての思考活動）を展開するという視点をもつことができる。データ収集においては対象者の IBD 患者の考えや行動を相互作用の中で理解しようとし、データ分析においてはデータとの相互作用の中で考えや行動を解釈する。この研究に必要とした質的研究や方法論、理論に関する文献も、まず図書館で手にとり閲覧し、僭越ながら選別して購入するというプロセスを経て、私の研究室の書棚に静かに並んでいる。

少し話は逸れるが、現在、図書室の絵本コーナーにディスプレイされているヨシタケシンスケ作『りんごかもしれない』（ブロンズ新社、２０１３年）は、哲学的で質的研究におけるものの見方、現象のとらえ方として示唆に富む。テーブルの上に１つのリンゴが置かれているという現象をめぐり、さまざまな思いや想像が繰り広げられている。今、手元におきたいと思っている１冊である。

さて、最後になったが、今回あらためて眺めた身近な二条キャンパスの図書室を紹介したい。佛教大学二条キャンパスは、本学開学１００周年を迎える前年の２０１１年に地域に開かれた大学の新しいキャンパスとして開校した。２００６年に紫野で設置された保健医療技術学部（理学療法学科、作業療法学科）とともに、図書室も紫野キャンパスから一部移設され、５万冊を収容する（看護学科は２０１２年に開設）。その新しい図書室には、学術書や専門書だけでなく、１７０冊を超える闘病記や多くの絵本が優しく並べられている。入り口ゲート近くの闘病記は「期待しているよ」と叱咤激励し、奥に続くフロアの絵本は「大丈夫だよ」とそっと癒してくれる。オンライン上での図書館利用（本学では BIRD：Bukkyo university library's Information & Research Databases）が可能になり、昨今のコロナ禍ではさらにその機能が有用であるが、本の装丁を通して感じるメッセージは、私にとって貴重である。小学生の頃から感じている図書室のもつ雰囲気は、司書の方々の穏やかさとともに佛教大学においても存在する。

図書館、そこには、多くの先人たちが時間とエネルギーをかけて探求し発見した成果や経験知を記した数々の著作がある。患者さんやご家族、時には医療者が、命を刻み綴った闘病記や体験記の数々、純真な子どものこころを呼び戻し生命を吹き込んでくれる絵本たちも集っている。思いがけず、目から鱗のプレゼントにもめぐり会う。図書館は、研究や教育に向かう学びの基地であり、その空間が醸し出す雰囲気とともに、私を初心に返らせてくれる場となっている。

藪下 八重（やぶした やえ）
保健医療技術学部看護学科教授

大阪府立看護大学大学院修士課程修了、兵庫県立大学大学院看護学研究科博士後期課程満期退学。
20 年余りの臨床経験ののち、近大姫路大学看護学部講師、大阪府立大学大学院看護学研究科准教授を経て 2018 年に本学着任、現職。専門分野は慢性看護学（元慢性疾患看護専門看護師）。

# 佛教大学附属図書館　新型コロナウイルス感染症に関する対応

★ 青字はオンライン対応

| ▼日付 | ▼実施内容 |
|---|---|
| 2020年<br>3月18日 | ・新型コロナウイルス感染症拡大防止のためのお願い<br>発熱・咳等体調不良者の利用制限<br>一般の方の利用制限<br>図書館・室内での感染症対策についての注意喚起<br>（こまめな手洗い、手指消毒、マスク着用、咳エチケット、他の利用者と距離をとって着席）<br>ブックポスト（夜間返却口）の終日開放<br>〈紫野〉多目的学習室、グループ学習室の利用を停止 |
| 4月2日 | ・WEBサイト「佛教大学教員著作紹介サイト・先生の書いた本」を公開<br>・ProQuestのデータベース、期間限定無料公開サービスのお知らせ（~6/30） |
| 4月3日 | ・オンラインで利用できる電子コンテンツの案内 |
| 4月8日 | ・Maruzen eBook Libraryの試読サービスの実施（~10/13） |
| 4月9日 | ・キャンパス内入構禁止に伴う臨時休館（~5/10、延長~6/7）<br>貸出期間の延長（返却期限日が3/18から5/11までのものについては、5/16まで期限延長）<br>図書の郵送等による返却について案内 |
| 4月10日 | ・Maruzen eBook Library、同時アクセス数の拡大（~7/31） |
| 4月17日 | ・図書館ポータルサイト「BIRD」の利用マニュアル（2020年度WEB版）公開<br>・Maruzen eBook Libraryにて、岩波新書・岩波文庫の電子ブック400冊アクセス可能（~2021/3/31） |
| 4月21日 | ・春学期（遠隔授業）の図書館利用についてのお知らせ<br>貸出期間の延長（当初の返却期限日が3/18から8/3までのものについて、8/7まで期限延長） |
| 4月22日 | ・送本貸出の利用対象者拡大（~7/31、延長~9/23）<br>・文献複写依頼物の郵送サービス利用対象者拡大（~7/31、延長~9/23） |
| 4月23日 | ・ProQuestのデータベースの使い方がわかるWEBセミナーのお知らせ |
| 5月11日 | ・キャンパス内入構禁止に伴う臨時休館延長（~6/7） |
| 5月14日 | ・医中誌 - 新型コロナウイルス感染症の関連情報の公開のお知らせ |
| 5月20日 | ・Maruzen eBook Library、合計147社の電子ブックの同時アクセス数50に拡大（~7/31） |
| 6月4日 | ・図書館新システムAlma運用開始<br>・図書館新システムにおける、図書館ポータルサイト「BIRD」内の「LIBon」利用ガイドを公開 |
| 6月8日 | ・キャンパス入構禁止期間中の事前申請制による図書館利用開始（~7/12）<br>対　　象：本学の学部生・院生・研究員・研究生・研修生・科目等履修生<br>本学教職員は申請不要。卒業生、その他利用者等は利用不可<br>方　　法：2日前まで（土日祝除く）に利用申請<br>開館時間：10:00-12:00、13:00-15:00（12:00-13:00 清掃スタッフによる清掃・消毒作業）<br>利　　用：一人１日１回１時間まで（１日４回入れ替え制）<br>１日の入館者数は、紫野キャンパス図書館50人、二条キャンパス図書室10人まで<br>サービスは、貸出・返却手続き、複写（コピー）のみ。閲覧室は使用不可<br>OPAC端末の利用台数を制限〈紫野〉１階・２台、〈二条〉１台<br>〈紫野〉地階書庫資料出納用簡易カウンターの設置<br>地階書庫は立ち入り不可（出納制）<br>研究個室、多目的学習室、グループ学習室は使用不可<br>新聞コーナー立ち入り不可<br>【図書館・室内での感染症対策】以降継続<br>1）カウンターに飛沫防止用ビニールシートを設置<br>2）利用者用端末の台数を制限し、利用可能端末にキーボードカバーを装着<br>3）事務用端末にキーボードカバーを装着<br>4）フロアマーカーを設置（入口からカウンターまで）<br>5）フェイスシールドを配備<br>6）換気のため、扉・窓を開放<br>7）アルコール消毒液を配置<br>8）注意喚起の徹底（入構前の健康状態の確認、手洗い・手指消毒・マスク着用・咳エチケット、社会的距離の確保）<br>9）入退館ゲートによる利用者管理<br>・TKCローライブラリーのリモートアクセス利用開始（~8/31、延長~2021/3/31） |
| 6月23日 | ・図書館新システムの導入に伴い、「お気軽検索」と「蔵書検索（OPAC）」のデザインを統合 |
| 6月24日 | ・図書館ポータルサイト「BIRD」の利用マニュアル（新システム対応ver.）を公開 |
| 7月13日 | ・キャンパス入構規制の段階的緩和に伴い、事前申請制による図書館利用条件を緩和（~7/31）<br>対　　象：本学の学部生・院生・研究員・研究生・研修生・科目等履修生<br>本学教職員は申請不要。卒業生、その他利用者等は利用不可<br>方　　法：2日前まで（土日祝除く）に利用申請<br>開館時間：10:00-12:00、13:00-15:00（12:00-13:00 清掃スタッフによる清掃・消毒作業）<br>利　　用：一人１日１回２時間まで（１日２回入れ替え制）<br>１日の入館者数は、紫野キャンパス図書館100人、二条キャンパス図書室20人まで<br>レファレンスサービスの再開<br>サービスは、貸出・返却手続き、複写（コピー）、レファレンスサービスのみ。閲覧室は使用不可<br>OPAC端末は利用台数を制限〈紫野〉１階・２台、〈二条〉１台<br>〈紫野〉地階書庫は立ち入り不可（出納制）<br>研究個室、多目的学習室、グループ学習室は使用不可<br>新聞コーナーは立ち入り不可 |
| 8月3日 | ・対面授業の実施および事務局窓口業務再開に伴い、事前申請を不要とし図書館短縮開館（~8/31）<br>対　　象：本学の学部生・院生・研究員・研究生・研修生・科目等履修生と本学教職員<br>卒業生、その他利用者等は利用不可<br>開館時間：9:00-18:00<br>閲覧座席数を制限して間隔を広く保った配席とし、閲覧席の利用を再開<br>館・室内の滞在時間は極力短くして、３時間以内<br>視聴覚資料、および貸出用ＰＣの利用は不可<br>OPAC端末の利用制限緩和〈紫野〉１階・２台、他の各階・１台、〈二条〉２台<br>〈紫野〉地階書庫の利用を再開。人数制限（同時入庫10人まで）のうえ、滞在時間１時間以内<br>研究個室の利用を再開。１室の利用を１日あたり１人に限定<br>新聞コーナー再開<br>アルコール消毒液を増配置<br>・送本貸出利用対象者拡大期間の延長（~9/23）<br>・文献複写依頼物の郵送サービス利用対象者拡大期間の延長（~9/23） |
| 8月4日 | ・KinoDenの試読サービスの実施（~10/31） |
| 9月1日 | ・短縮開館（サービスについては、8/3以降と同じ）<br>開館時間：9:00-17:00（授業のない日曜・祝日は休館） |
| 9月21日 | ・秋学期開始<br>・短縮開館（サービスについては、8/3以降と同じ）<br>対　　象：本学の学部生・院生・研究員・研究生・研修生・科目等履修生と本学教職員<br>卒業生、その他利用者等は利用不可<br>開館日程・時間：授業のある平日・土曜・祝日　：9:00-18:00<br>授業のない平日・土曜、オリエンテーション期間：9:00-17:00<br>・スクーリングのオンライン開講に伴い、授業のない日曜・祝日は休館<br>〈紫野〉多目的学習室、グループ学習室は、授業でのみ使用許可<br>OPAC端末の利用制限緩和〈紫野〉１階・４台、他の各階・１台、〈二条〉２台 |
| 10月2日 | ・EBSCOhostでAcademic Search Ultimateを期間限定で利用開始（~12/29） |
| 10月15日 | ・図書館について学べるWEBサイト「まナビゲーション」のリニューアル版を公開 |
| 10月28日 | ・ホームカミングデーの図書館紹介動画をyoutubeにて公開 |
| 11月2日 | ・Maruzen eBook Libraryの試読サービス実施（~2021/3/31） |
| 11月11日 | ・〈紫野〉研究個室の利用を拡大。１室の利用を１日あたり２人まで（利用後、利用者による消毒） |
| 12月1日 | ・卒業論文・修士論文等提出日対応の開館時間<br>〈紫野〉9:00-20:00（12/1~12/18、日曜除く） |
| 12月24日 | ・Maruzen eBook Libraryに人気の電子ブックをアクセス追加 |
| 2021年<br>3月24日 | ・図書館ポータルサイト「BIRD」の利用マニュアルの最新版（動画およびPDF）を公開 |
| 8月23日 | ・送本貸出の利用対象者拡大<br>・文献複写依頼物の郵送サービス利用対象者拡大 |

# 館内の感染症対策

フロアマーカー

飛沫防止ビニールシート

閲覧室

手指消毒用アルコール液

研究個室

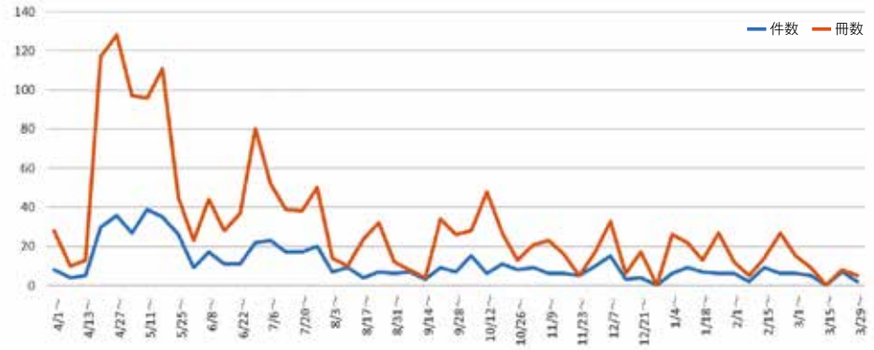
館内PC

## 2020年度図書館利用統計

| | 開館日数（単位：日） | | 開館時間（単位：時間） | | 月入館者数（単位：人） | | 1日平均入館者数（単位：人） | | 月別カウンター貸出件数（単位：件） | | 月別カウンター貸出冊数（単位：冊） | | 月別送本貸出件数（単位：件） | 月別送本貸出冊数（単位：冊） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2020年度 | 紫野 | 二条 | 紫野 | 二条 | 紫野 | 二条 | 紫野 | 二条 | 紫野 | 二条 | 紫野 | 二条 | | |
| 4月 | 7 | 7 | 56 | 56 | 784* | 68* | — | — | 315* | 25* | 752* | 59* | 90 | 288 |
| 5月 | 0 | 0 | 0 | 0 | 176* | 18* | — | — | 82* | 5* | 129 * | 8* | 251 | 462 |
| 6月 | 16 | 16 | 80 | 80 | 585 | 61 | 37 | 4 | 250 | 23 | 970 | 103 | 64 | 188 |
| 7月 | 21 | 21 | 105 | 105 | 837 | 70 | 40 | 3 | 307 | 26 | 1,091 | 76 | 83 | 251 |
| 8月 | 27 | 26 | 242 | 208 | 1,929 | 189 | 71 | 7 | 506 | 57 | 1,724 | 136 | 26 | 87 |
| 9月 | 20 | 19 | 167 | 159 | 4,357 | 279 | 218 | 15 | 873 | 83 | 2,269 | 187 | 26 | 66 |
| 10月 | 25 | 25 | 225 | 225 | 10,931 | 988 | 437 | 40 | 1,854 | 259 | 4,230 | 542 | 53 | 160 |
| 11月 | 23 | 23 | 204 | 204 | 9,475 | 1,083 | 412 | 47 | 1,644 | 218 | 3,767 | 440 | 31 | 74 |
| 12月 | 20 | 20 | 211 | 179 | 10,506 | 1,414 | 525 | 71 | 1,578 | 172 | 3,693 | 352 | 22 | 69 |
| 1月 | 19 | 19 | 170 | 170 | 7,819 | 1,862 | 412 | 98 | 1,299 | 141 | 2,946 | 351 | 33 | 99 |
| 2月 | 19 | 27 | 160 | 240 | 2,442 | 524 | 129 | 19 | 538 | 85 | 1,681 | 235 | 24 | 73 |
| 3月 | 24 | 24 | 192 | 192 | 1,995 | 186 | 83 | 8 | 423 | 50 | 1,220 | 126 | 19 | 42 |

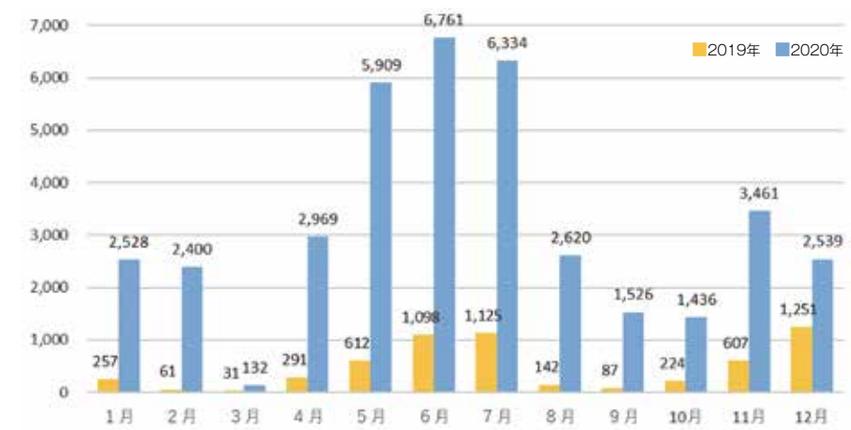
＊4月・5月は、臨時休館中の学内関係者および教職員の来館、貸出を含む（平均入館者数は算出できず）

### 2020年度送本貸出件数・冊数（週別）




※送本貸出利用対象者拡大期間：4月22日～9月23日

### Maruzen eBook Library アクセス数（月別）



# 佛教大学附属図書館の事業活動報告

## 2020〜2021年度前半期

### 2020年度

4月
特設サイト「佛教大学教員著作紹介サイト・先生の書いた本」を開設。

4月9日
企画展示（図書館1階）「佛教大学教員著作紹介サイト・先生の書いた本」と、佛教大学教育後援会の援助金による「SDGsに関連した図書」を随時更新しながら展示。
キャンパス内への入構禁止に伴う図書館臨時休館（新型コロナウイルス感染症拡大防止のため）。

4月22日
春学期遠隔授業（キャンパス入構禁止）に伴い、貸出期間延長。図書の郵送返却受付案内。

6月
図書館ポータルサイト「BIRD」利用マニュアルを公開。
「春学期図書館利用について」を掲出し、送本貸出・文献複写郵送等を開始。

6月8日
図書館新システムAlmaの運用開始。
図書館ポータルサイト「BIRD」お気軽検索と蔵書検索（OPAC）のデザインを統合。
図書館ポータルサイト「BIRD」の利用マニュアル（新システム対応ver.）を公開。
キャンパス入構禁止期間中の図書館制限開館（事前申請制入館対応）開始。

7月13日
「対面授業開始における新型コロナウイルス感染拡大防止のガイドライン（学生向け）」に則して、感染防止策を講じたうえでの再開。
キャンパス入構規制の段階的緩和に伴う図書館制限開館（事前申請制入館対応）。

8月3日
対面授業の実施および事務局窓口業務の再開に伴う図書館開館。

9月21日
秋学期対面授業実施に伴う図書館の開館。

10月15日
図書館について学べるサイト「まナビゲーション」をリニューアル。

3月24日
図書館ポータルサイト「BIRD」ガイダンス動画を作成し、公開開始。

**中央展示テーマ（2020年4月〜2021年3月）**

4〜7月
江戸時代の活字本

9〜11月
絵巻にみるヒーローたちの活躍―頼光と四天王（前期・後期）

12〜1月
詣（もう）でる。―「密」を避けて書物の中へ（前期・後期）

2〜3月
春を詠む（前期・後期）

### 2021年度

4月
昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大防止のガイドラインに則して、感染防止策を講じたうえでの短縮開館を継続。
企画展示（図書館1階）「佛教大学教員著作紹介サイト・先生の書いた本」と、佛教大学教育後援会の援助金による「人類と感染症」（新型コロナウイルス関連）を随時更新しながら展示。
対面ガイダンスに代わるものとして、図書館ポータルサイト「BIRD」利用方法を、動画版およびPDF版によって案内。また、図書館についてQ&A形式で学べるWEBサイトを紹介。

**中央展示テーマ（2021年4月〜9月）**

4〜5月
京みぎ・ひだり（前期・後期）

6〜7月
江戸時代の祇園祭（前期・後期）

8月
送り火〜五山と消えた「い」

中央展示（2021年8月）

QRコードによってデジタルコレクション画像が確認できる



## 佛教大学附属図書館の沿革と「成徳常照館」の由来

佛教大学附属図書館は、佛教大学の前身佛教専門学校があった京都市左京区鹿ヶ谷の地から、現在の京都市北区紫野に移転した１９３４（昭和９）年11月23日に木造２階建の閲覧室と、鉄筋コンクリート３階建の書庫を竣工落成しました。この図書館建設にあたっては、佛教専門学校初代校長である土川善激師（浄土宗大本山知恩寺68世住職）に深く帰依された篤志家上村常治郎氏のご遺族から多額の寄付をいただき、完成することができました。その後、１９６３（昭和38）年９月に開学50周年を記念して閲覧室、書庫などが増築され、１９７２（昭和47）年４月には、開学60周年記念事業として地上５階地下１階建で、研究室を配置した複合図書館棟が完成しました。現在の図書館は、開学80周年の記念事業として、同窓会、鷹陵同窓会などの卒業生、在学生ならび保護者、浄土宗寺院をはじめとした、本学有縁の方々からの多大な寄付によって、１９９５（平成７）年１月に着工し１９９７（平成９）年４月に竣工したものです。地上５階地下２階建で１００万冊を収蔵することができます。

佛教大学附属図書館の建物は、「佛教専門學校附属圖書館成徳常照館之記」にある「今ココニ冠スル所ノ成徳常照館ノ名ハ（中略）繙書ノ士専ラ徳器ノ成就ニ努メテ智光ヲ常照スル」から「成徳常照館」と名づけられ、書物をひもとく者が努力して、立派な人格者となり、智慧の光をいつも照らすようにという願いが込められています。この木額は佛教専門学校第７代校長江藤澂英師（浄土宗大本山善導寺61世住職）によって撰述されたもので、現在は図書館１階に掲げられています。また、同じく１階に設置されている浄土宗総本山知恩院にある八角形の経蔵「転輪蔵」（略して輪蔵）の縮小複製は、１９９８（平成10）年５月、図書館開館１周年を記念して、佛教大学同窓会、鷹陵同窓会、通信教育部学友会、教育振興会から寄附されました。輪蔵は、１回転させることによって、一切経を読誦したことと同じ功徳を得られるといわれています。



佛教大学附属図書館報『常照』第68号

発行日　令和3年10月23日
発行者　佛教大学附属図書館長　藤井透
発行所　京都市北区紫野北花ノ坊町96
　　佛教大学附属図書館
制　作　株式会社栄美通信

**後記**

佛教大学附属図書館報『常照』第68号をお届けします。2021年度から伊藤真宏学長、藤井透附属図書館長のもとで、整備を進めてまいります。新型コロナウイルス感染症に関する図書館のこれまでの対応を一覧にまとめました。現在も、安心してご利用いただけるように感染拡大防止に伴う対策を継続し取り組んでいます。図書館の機能をさまざまにご活用ください。